

人間形成を目的とした大学日本語教育の実践研究

——日本語口頭表現の授業を通して——

永 澤 濟

1. はじめに

本稿は、大学初年次教養教育における外国語科目「日本語口頭表現」の実践研究論文である。本授業は、日本語で各分野の専門を学ぶ学生に向けて、大学で必要な日本語力の養成を目的としつつ、学生の人格に働きかける教育をめざした。根底にあるのは次のような教育観である。

〈教育〉は、知識や概念や諸種の芸術的形象、動作などを学ばせることによって、人間が、個人としてこの世をよりよく生きるに要する能力の獲得を助成しようとする人格形成であり、人の個人としてのひとり立ちに関わる方法の一つである。生活訓練の目標・内容が道徳的資質や職業情報などであるのに対して、教育の目標・内容は知識、感情や意志、動作を対象とする。こうしてその人間の主体性をひき出し、熟慮と表現の方法を獲得できるよう育てる行為である点に〈教育〉とよばれる人間形成の技の特徴がある。したがって〈教育〉は、対象者に、異なったさまざまな立場にもとづく見解を提供し、それらの交流を通して、自由で批判的な意見表明や創造的な行為を保障するという点で、同じく目的意識的な統御であっても、旧来の意味での「教化」とは異なる行為である。

平岡さつき・中内敏夫（2004: 18）

外国語教育の目標は、第一には、ターゲット言語を「適切に」「正確に」運用する力の習得である。よって、習得段階に応じたトレーニングが必要であり、効果的に「指導」する技術¹⁾が教師には求められる。しかし、最終的な目的はトレーニングや効果的な指導それ自体ではなく、上に引用した「人間が、個人としてこの世をよりよく生きるに要する能力の獲得」「人間の主体性をひき出し、熟慮と表現の方法を獲得」するための人間形成である。そのような教育とは、大学の外国語教育の場においてどのようなものであり得るかを実践的に追究した結果を、以下に報告する。

2. 授業概要

名古屋大学教養教育院（一般の教養学部）において、理系学部1年生を対象とした2020年度秋学期外国語科目「日本語（口頭表現）」の授業である。「日本語（文章表現）」とペアで、毎週各1コマずつ計15回実施した。

受講者は中国語母語7名、韓国語母語1名の計8名、所属は医学部（2名）、農学部（4名）、理学部（2名）であった。日本語学習歴2年前後と長くはないが、日ごろ日本語で大学の講義を受けており、自分の専門についても日本語で話せる段階に達している学生が多い。コロナ禍により1名未渡日で、全回オンラインで行った。

シラバスの授業目標は次のように設定し、日本語で積極的に表現すること、間違いを恐れないことを強調した。

- (1) アカデミックな場で、適切な口頭表現をする力を身につける。
- (2) そのために、多様な日本語表現にふれ、様々な表現や表現法を学ぶ。
- (3) 文化、社会、科学等に関する基本的な内容を、日本語で理解し伝える総合力を養う。

3. 各回授業内容と実践記録

15回の授業内容と、各回の実践記録は次の通りである。

回	月日	授業内容	実践記録
1	10/8	①自己紹介 「専門・関心について」	<p>次のような専門・関心が魅力的に語られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生A：理学部。超電導等材料科学系と宇宙素粒子系に関心。 ・学生B：理学部。実験系に関心。日本の科学コミック翻訳本をきっかけに小学生時から興味もつ。 ・学生C：農学部。高血圧・糖尿病等に関する機能性食品・薬品に関心。 ・学生D：農学部。神経伝達・ウィルスの侵入にも関与するが未解明の点が多い、糖の人体における役割に関心。 ・学生E：農学部。昆虫分類学志望。幼い頃より、熱帯等で本格的な昆虫採集を行ってきたことを写真も交えて紹介。 ・学生F：農学部。クワガタ等昆虫の飼育に関心。 ・学生G：医学部。一次予防に関心。きっかけは内分泌異常からうつ病を発症した知人に接したこと。 ・学生H：医学部。超音波診断に関する画像技術の向上に関心。
		②ニュース語彙・表現 〈テーマ〉 「ノーベル物理学賞授賞」 〈習得表現〉 さえ、一般相対性理論、 謎に包まれる等。	<p>ニュース内容・表現の両面に積極的な関心が示された。「さえ」の用法を考察する過程で、「ブラックホールは光さえ…」において光は速度の速いものの極端な例であることなど、科学的視点を交えつつ的確な説明がなされた。</p>

回	月日	授業内容	実践記録
2	10/15	①ニュース語彙・表現 〈テーマ〉 「岩手でマツタケ豊作」 〈習得表現〉 ～でにぎわう、～とあつて、(大きなもの)で、夏／冬場(春場なし)、雨量、豊作、店頭等。	ニューススクリプトの重要表現を空欄にし、穴埋め式で適切な表現を推定していった。学生同士知恵を出し合い、ほぼ自力で推定できた。推定できなかった「半額とあつて」「大きなもの <u>で</u> 」の用法について、類例を出して解説。 「道の駅」「岩手県」「マツタケ」等の文化的理解を要する語によく通じている学生もあり、積極的な発言がなされた。音読もスムーズ。
		②プレゼンテーション 「記事等紹介」準備	ニュース記事等を紹介するプレゼンテーションについて、目標・時間・注意事項説明。 発表で使える表現を提示した後、各自原稿準備。内容は最新のニュースでなくてもよいかとの質問があり、伝える意義があるものなら時期は問わないこととする。
3	10/22	①ニュース語彙・表現 〈テーマ〉 「弘前市の忍者屋敷 観光施設として活用へ」 〈習得表現〉 忍者、江戸時代、鶯張り、床の間、～を盛り上げる、売り渡す等。	前回同様の穴埋め式で、指名せず自由発言の形式で進め、活発な発言があった。日本の地名などの知識も豊富である。
		②プレゼンテーション 「記事等紹介」準備	原稿・資料準備。原稿チェック希望者にはコメントしてメールで返却。原稿は、想定より短いものや、情報の取捨選択などに改善の余地などがあったが、初回であるため内容の細部にはふれず、まずやってみることを重視。テーマの選定理由を追加するなどの助言にとどめた。
4	10/29	プレゼンテーション 「記事等紹介」実施 (1回目)	以下のような多彩なテーマで、内容豊かな発表会となった。質疑応答も積極的であった。 ・学生A：「火星の地球への大接近」。接近の意味を数値等で説明。自らの観測にも言及。質疑応答では、肉眼で接近が捉えられるか、火星の特異な生命環境、流星群の話など。 ・学生B：「コロナウィルスの再感染」。再感染時の重症化やワクチン効果等。質疑応答では、抗体ができて重症化する理由等について、発表者以外も加わり活発な議論。 ・学生C：「ゲゲゲの鬼太郎がアニメ初のギャラクシー賞授賞」。目に見えない妖怪を描き出すことと、発見を待つ微生物への自己の関心とが重なり魅力を感じるとのこと。質疑応答は、賞の位置づけ、作品のメッセージ性、「おそれ」等について。 ・学生D：「クリスパー・キャスナイン利用による遺伝子操作技術とノーベル賞」。元になった大腸菌の遺伝子解析(日本人研究者による)にも言及。質疑応答で、他の遺伝子操作技術との相違等に展開し、学生の関心が高かった。 ・学生E：「新発売のiPhone 12 miniの魅力」。製品の客観的・個人的魅力について語られた。スライドでのスケールの示し方に工夫が見られた。質疑応答では、デザイン理念、サイズの大小と値段との関係等について意見交換。 ・学生F：「バーチャル・ユーチューバー」。現代性の高いテーマに

回	月日	授業内容	実践記録
			<p>ついて、最新の実態を示した。質疑応答も活発。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生G：「9月に日本で女性自殺者増」。急増の実態を数値で説明。質疑応答では、中国で農村部のデータが計算に含まれていない可能性等を指摘。
5	11/5	<p>①プレゼンテーション 「記事等紹介」実施 (2回目)</p> <p>②プレゼンテーション 振り返り、講評</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生H：「ニセハナマオウカマキリの密輸」。昆虫への関心に基づく内容。質疑応答では、「ニセ」は語構成上「花魔王」にかかるか、「花」にかかるかについて、花への擬態を意味する後者であることなど高度な議論が日本語でなされた。 <p>学生が1人ずつ感想を述べた。他者の発表を聞いて感銘を受けたとのこと。特に関心をもった話題に言及する等、刺激を受けた様子である。</p> <p>自身の発表については、緊張で原稿を見る余裕もなかった、難しいテーマを選んだが関心をもってもらえて嬉しかった、質問を受けて気づかされた、カタカナ語を日本語らしく発音することをテーマにした等、主体的な感想が述べられた。</p> <p>教師からの講評として、個々の興味深い発表を称えた。学生の感想を受け、英単語が日本語化する際の音変化や中国・韓国語の場合について意見交換。学生から「トール」(中国語でルが落ちる)、「ソファ」(韓国語でf>p音)等の例が提示された。日本語における閉音節の回避、ハ行音が古くはp音であったこと等に発展させた。その他、発表を受け文法上注意すべきテンス表現(～の前/～の後)を解説した。</p>
6	11/12	<p>①ニュース語彙・表現 〈テーマ〉 「梅田稔氏の名前」 〈習得表現〉 遠からぬ(縁)、ふって湧いたような(話)、(九州の)のへそ、(職責を)果たす等。</p> <p>②プレゼンテーション 「ふるさと・好きな場所について」準備</p>	<p>前回同様の穴埋め式で、指名せず自由発言の形式で進め、活発な発言があった。ニュース内容もよく理解。形容詞否定の文語表現「～からぬ」を知っている学生もいた。アニメ作品で覚えたという。</p> <p>目標・時間・注意事項説明。 原稿・資料準備。原稿チェック希望者にはコメントしてメールで返却。</p>
7	11/19	<p>プレゼンテーション 「ふるさと・好きな場所について」実施 (1回目)</p>	<p>以下のような個性豊かなテーマで、3コマを使って発表した。発表も質疑応答も積極的であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生B：万里の長城について。「宇宙から見える」との教科書の記述が事実と異なり書き換えられたエピソードなどを紹介。質疑応答では元の姿をどこまで残すかについて日本の城とも比較。学生は姫路城等への知識をもっている。 ・学生D：故郷の市の様子をいきいきと伝えた。質疑応答では、肉まんや餃子をはじめとする食文化の韓中日の異同について発言が尽きなかった。 ・学生E：毎夏昆虫採集で訪れる雲南について。熱帯雨林の望天樹やキラツリーなどの科学的説明が圧巻。その他民族衣装・花卉・食などの文化的な話も豊かに展開。 ・学生F：中国東北地方の「大青楼」について。建築様式や張学良の暮らしを紹介。

回	月日	授業内容	実践記録
8	11/26	プレゼンテーション 「ふるさと・好きな場所 について」実施 (2回目)	<p>前回の発表の続き。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生A：北京の胡同に残る古い建築や街並みの魅力を紹介。質疑応答では四合院という建築様式や庭の機能が話題になった。 ・学生C：母校の高校の特色ある教育について。受験重視の一般路線ではない、自主意欲を重視する大学的教育について語った。スライドの写真も効果的。聞き手の学生は異口同音にいい教育でうらやましいと賞賛しコメントが尽きなかった。 ・学生H：瀋陽の故宮について、北京と比較しつつ歴史などを紹介。質疑応答で、発表内容の細部が深まった。
9	12/3	①プレゼンテーション 「ふるさと・好きな場所 について」実施 (3回目)	<p>前回の発表の続き。</p> <p>学生G：コロナ禍で人と人が距離を保ちながら人の存在を感じ取れる公園として、名古屋市の千種公園を紹介。質疑応答では、中日の公園の違いなどに話題が及んだ。</p>
		②プレゼンテーション 振り返り・講評	<p>各発表への感想を、学生同士（教師も）、名古屋大学オンライン学習支援システム「NUCT」にアップロードした。互いに温かい眼差しで豊かな感想が述べられた。他者の発表に真剣に耳を傾け、丁寧に感想を表現し、交流ができたことは、個々人の発表の成功以上に、本課題の成果であった。</p> <p>教師からの講評として、力を発揮し彩り豊かな発表がなされたことを称えた。発表中の事例をもとに、下記発音（長音、清濁、アクセント）の区別と意味、文法について、個人を特定せずに解説。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キョウカシヨ（教科書）／キョカシヨ（許可書） ・サトウ（砂糖）／サドウ（茶道） ・サ]トウ（佐藤）／サト]ウ（砂糖） ・コウクン（校訓）／コ]ウ君（黄君） ・私の生まれたト]シ（都市）／トシ（年）
		③インタビュー活動 「自分について話す、聞く」解説、導入ビデオ視聴	<p>「自分について話す、聞く」インタビュー活動に向けて解説を行った。</p> <p>導入教材として漫画家・手塚治虫氏への10分程度のインタビュー番組（NHK）を用いた。選定理由は、内容面で、学生の関心事（漫画・天文・昆虫・医学等）とリンクすること、表現活動の厳しさと魅力が語られ、学生の感性に響くと考えられたこと、表現面で、自然な話しことばや豊かな表現が用いられていることである。手塚治虫の名前や作品を知っている学生もいた。</p> <p>ビデオをひと通り視聴した後、スクリプト（文字起こし）制作の分担を決定。教師が各1分程度のパートに分割して見出しを付け、各自の関心に応じて希望のパートを募ったところ、積極的に名乗りが上がった。（宿題として持ち帰り）</p>
10	12/10	①インタビュー活動 「自分について話す、聞く」導入ビデオ視聴 〈習得表現〉 荒唐無稽、世に送り出す、 ～の神様、新し物好き、 ～なるもの、とてもじゃない、あまりに、のめりこむ、ばっちり等	<p>分担作成したスクリプトを共有し、冒頭約3分半の内容・表現を確認。意欲的に取り組み、類例の表出などが積極的になされた。「～なるもの」など、手塚氏のやや古風な口語は聞き慣れないようであった。</p> <p>口語において文字通り発音されないケース（「あまり ni」の n 脱落、「の me りこむ」の me 弱化等）について解説。</p>

回	月日	授業内容	実践記録
		②インタビュー活動 「自分について話す、聞く」ペア決定	次々回インタビューのペアを指定し、質問を5個程度考えておくよう伝えた。より深い内容に踏み込めるよう、あえて専門・所属が近い学生同士のペアとし、学生にもその趣旨を伝えた。
11	12/17	①インタビュー活動 「自分について話す、聞く」導入ビデオ視聴 (習得表現) 風刺、枠にはまらない、目の当たりにする、肩身が狭い、やり玉にあがる、もうなんというか等。	前回の続き、約3分のテキストについて同様に進行。内容は概ね理解されたが、細部の口語表現や文字通りでない音の聞き取りに難があり、学生がそのことに自覚的になった。聞き取りの難しい点や重要な表現は繰り返し再生し発音練習をした。
		②インタビュー活動 「自分について話す、聞く」準備	次回インタビュー実施に向け解説。質問候補5個程度を、相手に予め知らせておくこととした(返答に応じて当日の質問変更は可)。
12	12/24	①インタビュー活動 「自分について話す、聞く」導入ビデオ視聴 (習得表現) 何べんも、ぼっかり、～にあふれる、負けじ魂、～きゃならん、～てやがる、～わい(文末)等。	前回の続き、約3分のテキストについて同様に進行。やはり細部の聞き取りに苦戦したが、「音としては聞こえないけれど、～と言っていますか」等の発言がなされ、難しさの在り処が分析的に意識化されてきた。
		②インタビュー活動 「自分について話す、聞く」実施	ウェブ会議システム Zoom のブレイクアウトルーム機能で10～15分のインタビューを実施し、録画または録音した。趣旨に沿って優れたインタビューがなされた。了承を得て、動画または音声データを共有。互いに視聴し、振り返りのコメントを提出した。教師からもコメントを送付した。
		③プレゼンテーション 「専門について話す」説明	冬休み中、プレゼンテーションの内容を考えておくよう伝えた。
13	1/14	プレゼンテーション 「専門について話す」準備	新年の挨拶をし、教師からのメッセージを伝えた後、発表原稿・資料準備。
14	1/21	プレゼンテーション 「専門について話す」実施 (1回目)	以下の専門的なテーマについて、いきいきとした発表ができた。質疑応答・コメントシートでも互いに関心を共有し称え合っていた。 ・学生A：物理学からみるガラスの不規則構造 ・学生B：ジェネリック薬品の科学と特許 ・学生F：PCR法の原理(DNA増幅) ・学生H：卵巣がんの検査技術の開発
15	1/28	プレゼンテーション 「専門について話す」実施 (2回目)	以下の専門的なテーマについて、いきいきとした発表ができた。質疑応答・コメントシートでも互いに関心を共有し称え合っていた。 ・学生C：ウィルスのボルチモア分類法と人間との関係 ・学生D：人体における糖の機能 ・学生E：昆虫分類学における目の新設 ・学生G：筋肉の動きの分子レベルの解明

4. インタビュー活動の実践を例に

以上の授業実践の中から、第9回～12回に行ったインタビュー活動「自分について話す、聞く」を例に、授業実践の結果を考察する。本活動は次の2点を目的に据え、10～15分のインタビューをペアで行った。

- a. 一方方向のプレゼンテーションとは異なる二者間の即時的なやり取りを経験すること。
- b. 他者との交流を通して自身の人生を豊かにすること。

より深い内容に踏み込んで対話ができるよう、下記のようにあえて専門・所属が近い学生同士でペアを組み、学生にもその趣旨を伝えた。

学生A・B（理学）

学生C・D（農学）

学生E・F（農学）

学生F・H（医学）

4.1. インタビュー活動の記録

インタビュー活動の対話記録を、録画・録音データから抜粋して以下に示す。

〈学生A・B〉

A：Bさんは同じ理学部ですよ。なぜ工学部でなく理学部を選択したのですか。

B：僕、化学が好きだから、もし工学部にいくなら多分、化学工業みたいな専門ですけど、まあ、でもカリキュラムを見たんですけど、大体は物理ばかりなので、僕の好きな化学ではないと思いましたから、理学部を選びました。

A：なるほど、つまり2年から化学専攻になるってということですよ。その一、化学の魅力ってどこだと思いますか。

B：多分、物質を、分子を自分の好きな形にする、合成というのは化学の醍醐味だと思います。

A：そういうことですか。まあ、とりあえずこの辺にして、趣味とかにいきたいんですけど、Bさんて物知りですよ、普段、どんなサイエンスの番組とか見ているんでしょうか。なんか、おすすめはありますか。

B：日本語の番組は見ていないですけど、まあ、中国語の番組は一応見えています。まあ、でも好きな番組というより、好きなテーマの番組を探すというのが大体、主にしていること。

A：たとえば……

B：たとえば、まあ最近は、話題になってる中国のロケット、月にいくロケットに関して、最近は、このテーマに対してたくさんビデオがあるから、好きなビデオを見るということです。

A：そうですね、機会があれば、僕もぜひ見てみたいです。ちょっと突然ですけど、Bさんは高校からもう日本に来ると決めたんですよね、日本語はどう勉強したんですか。

B：最初は、普通にゲームをやるとか漫画を読むために日本語を勉強したけど……

[中略]

B：Aさんも同じ理学部なので……どの学科に進みますか。どうしてですか。

A：そうですね、絶対、物理ですね。高校から始まって。簡単に言うと、まあ物理が好きっていう。実際は、物理の物質の方に、ミクロ的に物質の不思議な現象を解明するみたいなことをやりたいです。

B：ああそうですか。将来はどんな研究をしたいですか。どの研究室にいきたいですか。

A：そうですね、今は物質にちょっと興味をもったんですけど、素粒子にも興味もっています。ですので、今はまだどっちの研究室にいくのかまだはっきり決めてないですね。

B：さっき、Aさんは物質に興味あると言われたんですけど、えーと、物質の、具体的に、どの……、物質の合成ということですか、それとも他のことですか。

A：合成っていうより、その、まあ、物質の合成ってなったらそれは化学の範囲かもしれないですね。それより、物質の電子、粒子の隣の電子の流れとかスピンの回転とか、そういう関係の、相互作用を研究するみたいなことをやりたいです。

B：つまり性質の解明ということですか。

A：まあそうですね。たとえば、超電導とか。今は超電導は主に温度の高い超電導を研究してるみたいで、そこがどうやって高温になって超電導になれるかっていうメカニズムはまだ解明していないみたいで、そういうみたいな研究をやれないかっていうことですね。

B：わかりました。じゃあ、趣味はなんですか。勉強以外の。

[後略]

〈学生C・D〉

D：Cさんて、パソコンで絵かくでしょ。僕はパソコンじゃなくてアナログでよく描くから。

C：水彩とか好き？

D：好きなんだけどうまくはできない。

C：ペンで描くのが好き？

D：うん。

C：日本でなんで笑うか理解できなくて……特に面白い漫画を描けないんです。私描くと、生きる人と死んだ人、そういうのをテーマにして、あまり見てくれる人いないと思う。やは

り漫画は笑い話とか好きな人が多いし。それと闘う漫画が人気らしい。私、Dさんみたいに紙で描いてみようかな。

D：いいね。

[中略]

D：コロナとストレスと趣味の関係についてインタビューしていきたいと思います。Cさんはコロナのパンデミック以前の趣味は何だったんでしょうか。

C：はい、コロナ以前の趣味は、そうですね、アニメとかを見るのが好きでした。

D：僕もアニメを見るのが趣味なんですよ。

C：あ、よかった。

D：ちなみに、どういうアニメが好きなんですか。

C：そうですね、当時は戦闘もののアニメとか結構好きで見ました。

D：なるほど。じゃあ、コロナのパンデミックの後で、新しくできた趣味とか、趣味が変わったとかありますか。

C：そうですね、結構大きく変わってしまって、今ではジャニーズにはまってしまっています。

D：すみません、あの、聞き取れなかったんですけど……

C：あ、ジャニーズですね。男性アイドルグループにはまっています。

D：どうやって趣味をやるんでしょうかね、アイドルを楽しむというのは。

C：うーん、どうでしょうかね。このコロナ禍の折なんで、実際、ライブとかできないんで、配信という形でコンサートをやってくれて、それをよく見えています。

D：ああ、ネットとかで配信……

C：はい、そうですそうです。

D：趣味の頻度は、自粛中にどれくらいでしょう。

C：ほぼ毎日です。(笑)

D：やることないから。自分も趣味に夢中になります。(笑) じゃあ、ストレスについてもちょっと質問したいんですけど、コロナの前後でストレスの増減はどうだったのか。聞きたいです。

C：そうですね、コロナのパンデミックが起こって最初のうちは、やっぱり家から出られないとか、せっかく大学に入ったのに友人ができないとかで、かなり辛い思いをしました。でも、最近は、もう一周まわって慣れてきたというか、コロナパンデミック下での生活になっていうんでしょう、いいところをたくさん見出せるようになったので、逆に今はそっちの方が便利なんじゃないかなと思ったりもしています。

D：ああ、なるほど。ちなみに好きなのところって、どういうところなんですか。

C：そうですね、まずは大学の授業がオンラインであることですね。[後略]

〈学生 E・F〉

E：Fさんは甲虫好きだと聞きましたので、いつから好きになりましたか、きっかけを聞きたいです。

F：それはですね、すごく小さい時から、昆虫とか、遊んだ時に出会ったり、自分で探したりして、これは面白いなと思って、すごく興味をもって本とか資料とか調べたり、これもすごい、あれもすごいで、こうして今まで続いています。

E：本とかどんな本を見ましたか。

F：すごくシンプルな絵本です。最近、本を買いたいなと思うこともありますけど、調べたら結構高くて……甲虫について、とても専門的な文献があるって言われたんですけど……

E：ああ、図鑑とかすごく高くなるやつですね。ああ、もしどこか図書館とかあったら借りてもいいですけど。

F：図書館、一応調べたんですけど……

E：全然なかったんですか。

F：そうなんですよ。

E：まあそうですね、研究者がいないと借りたりする人もいないんですね。

F：中央図書館も、農学部図書館も、理学部図書館もなかったんですよ。

E：そっか、残念ですね。それでは次に進みましょう。Fさんは、甲虫を飼育していますね。たくさん。今、どれくらい飼っていますか。

F：菌糸ビンの中に入ってるのは、多分、40匹、50匹くらい。

E：おお、すごい。そんなに数が増えたんだ。

F：タラントゥスは27匹。

E：半分がそれ？

F：そうそう、スマトラは7頭になっちゃった。ちょっとびっくりさせて…… 急に……

E：突然死っていう感じ……

F：そう。今、気温も低くて危険性が高い。

E：残念です。エアコンいつもつけていないとだめっていう感じですか。

F：あんまりそういうことはなかったけど、幼虫は温度が低すぎると、2齢から3齢に転齢する……

E：ああ、脱皮するとき。ええと、大きい個体、大きい甲虫を飼育することが好きと聞きましたので、ええと、大きい個体はFさんにとってどんな意味がありますか。

F：それは、目標みたいなんだと思います。これが好きになるという原因があって、まあ、自分がこれを飼育している価値が探せると思って。必ず、容形とか色とかに特化してもいいし、大きくさせる、どうやって大きくなれるかなという研究をしても面白いなと思って。えっと、僕にとっては、個人的には大きな個体がすごく好きなんで、体長はすごく重要な

指標。1ミリでも大きくなったら、それもすごく嬉しいことだと思う。

E：そうですね、大きい個体をみると、小さい個体とすごく雰囲気が違いますね。ありがとうございます。ええと、今まで飼育した甲虫の中で一番好きな種類、または個体は何ですか。

F：今、一番多く飼育してるのはタランドゥスなんだけど、一番好きなのは、やっぱりスマトラオオヒラタ。

E：スマトラですね。

F：なんというか、もともとオオヒラタは体が大きいのが特徴で。

E：大きくなりやすいということですか。

F：そういうこともありますけど、一番大きくなれる品種。頭の幅とか胸部の幅がとても重要な指標で。たとえば、パラワンオオヒラタは、ええと、頭は33から34くらい、ま、これぐらいになったら100ミリを超える。顎が細くて長いから。でも、スマトラヒラタは頭が、34、35、36を超えたら100ミリを超える。実物で見たスマトラは、怪物みたいに迫力があって、一番好き。

E：飼育に関してこれでおしまいです。前回、発表の時〔注：本授業第5回目のプレゼンテーション〕、昆虫の密輸、カマキリの卵とか甲虫もそうですが、それについて紹介して頂きましたが、飼育者として、アマチュアとして、僕たちはどういう立場をとるべきだと思っていますか。〔後略〕

〈学生G・H〉

H：大学に進学した時は、なぜ理学療法専攻を選びましたか。

G：そうですね、自分は特にやりたいこととか、実際はなかったですよ。将来〇〇になりたいとかは、進学の時はまだ漠然として、何も考えなかったです。でも、ひとつだけはっきり言えるのは、絶対、将来、役に立つ人になりたいですよ。社会に、他の人に価値のある人になりたいです。そこで考えた。どうやって、他人とか社会の価値になるのかなと思って。そして、その時、友人かな、友だちが、体が色々あって、うつ病にかかったんです。そして、彼がかかったんですけど、かなり時間が経った後で、学校も辞めて、診察をして、最後にうつ病だとわかった。そこで色々治療をして、最後には治ったんですけど、学校にも戻ったんですけど、その友だちと話して、一番助かったと思ったのは、一番お世話になったと思ったのは、理学療法士の先生でしたって。そこで、憧れて、いいなあって思って。ほんまに、この理学療法士の先生になったら、ほんとに、誰かの助けになれるなと思いました。そのとき。そして、他の職業とかは確かに会計とか、設計とか、デザインの仕事も社会に貢献できるんですけど、でも、実感できないと思ったんですよ。たとえば、デザイナーはデザインで社会の生産力が高くなるのは、社会のためになると思うんで

すけど、人の幸福につながっていない。人の健康の向上に貢献できるなら、直接にその人は幸福に感じられますよね。そこで、いいなあと思って。理学療法士になりたいなと思い始めました。実は自分も、必ずしも理学療法士になりたいと思ったことはなかったんですけど、他の専門はより何にも知らなかった状態なので、この専門を選びました、という感じかな。それも理由の一つかな。Hさんはなぜ検査を選んだんですか。

H：私も、大学に進学するときは、何を専攻に選ぶかわからなかったです。

G：やはりそうですね。みんなそうかな。

[中略]

G：少し前、Hさんと進路について話した時、卒業したらどうするのと聞いた時、まだわからないんですよと答えたでしょ。最近のはっきり言えるようになったのかな。

H：私は、学部を卒業したら大学院に進学したい。その後で、多分、中国に帰りたいと思います。

G：ああ、まだ先は長いな。大学院に進学すると、後はまだええと、1、2、3、4、5年かな。まだ5年ある。何があるかまだ全然わからないでしょ。

H：はい、そうですね。(笑)

G：多分、1年前は12月24日でしょ。1年前の今日って、今年がこんな状況になるとは誰も思わなかったでしょ。ほんまに誰もわからない。コロナとか。先が長いから……

以上にみえるように、どのペアも、内容的に、人生や専門、互いの関心に関して興味深い質問をし、深く豊かなインタビューを展開した。表面的なインタビューではなく、真に聞きたいことがきけており、真のコミュニケーションになっている。

4.2. 学生の振り返り

次に、本活動について、学生自身の振り返りのコメントをみてみたい。「インタビュー（対話）をやってみた感想（よかったこと、気づいたこと、今後に向けて）を書いてください」とし、自由記述で書かれたものである。寄せられたコメントを、以下に〈言語運用面〉と〈内容面〉に分けて示す。

〈言語運用面〉（主に、第4節冒頭の目的aに対応）

- (1) 質問にうまく反応して答えたのはよかった。大学入試の面接の時に比べて自分の日本語力が伸びたと感じた。今後、適切な相槌を習得したい。
- (2) 手塚先生のインタビューを思い出しながら〇さんと会話をした。より自然に日本語が話せるようになった。
- (3) 口頭表現と文章表現の違いについて、新しい認識があった。

- (4) 会話は発表より臨機応変の能力が必要で、今回はまだ不足を感じたが、これからはこの能力を身につけるようにさらに頑張りたい。
- (5) 声を大きくはっきり話すのが重要だと感じた。目線コントロールがポイントと考えた。
- (6) 聞く力を磨くためにニュースなど日本語をもっと聞くようにしたい。同時に、少し高級な日本語表現も日常から心掛けたい。
- (7) 手塚先生のスクリプトを作るとき、Filler 表現が存在しているからこそ「自然に話している」と思ったが、自分のインタビューを振り返ると、「あの」「えー」が頻発し、「緊張して自信がなさそう」という印象が残ってしまったかもしれない。今後改善したい。
- (8) うまく質問の順序を作って話を進める方法、相手の話に適切に回答するコツなど、色々勉強になった。

〈内容面〉（主に、第4節冒頭の目的bに対応）

- (9) 普段からBさんと食事をするが、今回初めて専門の話をし、選択の経緯や、知識をふやすコツを聞いた。また他の人たちの昆虫の話や将来の志望など、普段話さないことが聞けた。大学に入学し、様々な専門の人と出会ったことを実感し、非常によかった。
- (10) 楽しい話題（アニメ）で盛り上がった。最後まで二人の情報がうまく交換でき、相手をより深く知ることができた。
- (11) 私たちが専攻を選んだとき、それを愛するからではなく、家族の意見や職業の影響を受けたという共通点を発見した。当初の選択は消極的だったが、大学での1年間の勉強を通して専攻に興味を持ち、人生のキャリアとして努力する意欲を今回自覚できた。
- (12) Cさんとは同じ学科同じクラスで、ラインなどで連絡を取り合っていたが、オンライン授業のため直接話すことができず残念に思っていた。今回話して、共通の趣味をもつことが分かってとても嬉しく思った。いつか直接会って話したい。
- (13) ほぼ全部が昆虫についてというユニークなインタビューだった。Eさんは昆虫の分類に情熱をもち、ラテン名を覚えるほど本気で、採集経験も豊富。自分は飼育中心、特定の生きた昆虫が興味の対象で、遺伝子・系統に関心がある。面白い話があった。

以上の学生自身の振り返りについて、〈言語運用面〉のコメントは、適切な言語運用に関するもので、主に本活動の目的a「一方向のプレゼンテーションとは異なる二者間の即時的なやり取りを経験すること」に対応する。「臨機応変の能力が必要」「相手の話に適切に回答」など、対話における言語運用の即時性や、口頭表現と文章表現の違いへの気づきが示されている。また、相槌、適切なFiller表現、声の大きさ、目線コントロールなどへの分析的視点がみられる。「手塚先生のインタビューを思い出しながら」ともあり、導入教材が有効に機能したこともうかがえる。さらに、「大学入試の面接の時に比べて自分の日本語力が伸びた」「より自

然に日本語が話せるようになった」との自覚が得られたことは、今後、大学を中心にアカデミックな活動をしていくにあたっての自信になると考えられる。

〈内容面〉のコメントは、本活動の目的 b 「他者との交流を通して自身の人生を豊かにすること」に対応するとみることができる。「今回初めて専門の話をし」とあるように、普段から交流のある学生同士にとっても、初めてアカデミックな関心について深く話す機会になったようである。また「オンライン授業のため直接話すことができず残念に思っていた」という学生同士の交流の機会にもなっている。そして、「相手をより深く知ることができた」「共通点を発見した」「ほぼ全部が昆虫についてというユニークなインタビューだった」など、互いの人となりや関心に深く接したことを喜ばしく感じている様子がうかがえる。さらに、他のペアのインタビューを視聴し、「他の人たちの昆虫の話や将来の志望など、普段話さないことが聞けた。大学に入学し、様々な専門の人と出会ったことを実感し、非常によかった」とのコメントもあり、活動全体から刺激を受けたようである。

以上の振り返りが示すように、学生自らが、自身の日本語運用力の向上を自覚したこと、自己の課題を分析できたこと、クラスメイトから豊かな刺激を得、同時に人間的な共感や理解が示されたことは、本活動の成果だといえる。

4.3. 実践結果の考察

インタビュー活動の目的 a、b を概ね達成したといえる。〈言語運用面〉においては、適切に日本語を運用し、高度で豊かな内容を伝達し合えた。学生自身の振り返りからも、インタビューというややフォーマルな場での対話を経験し、通常の日常会話とは異なる点で様々な気づきを得た様子がうかがえる。また、自身の日本語力の向上を自覚できたことは、今後のアカデミックな活動を支える自信となるであろう。

また一方、学生の振り返りのコメントに〈内容面〉に関しての感想が多くあったことは特筆すべき点である。異口同音に、他者からの気づきや他者への関心・共感が示されており、日本語により豊かな交流ができた様子がうかがえる。このことは、本活動が、言語運用力の習得にとどまらず、人間的な成長（人間形成）につながったとみることができる。

5. まとめ

以上「日本語口頭表現」の授業実践において、学生は自身への気づき、他者からの気づきを得て、より豊かな自己を確立させたとみることができる。その点で、人間形成に関して一定の成果を得たものと考えられる。

実践の場で、教師からのほたらきかけとして有効に機能したと考えられるのは、一つには、教材や活動テーマの工夫である。インタビュー活動の導入教材として手塚治虫氏へのインタ

ビュー番組を取り上げたが、その選定理由は、学生の関心事（漫画・天文・昆虫・医学等）とリンクすること、また、表現活動の厳しさと魅力が語られ、学生の感性に響くと考えられたことである。また、15回の授業の中で、いくつかのニュース教材を取り上げたが、その題材の選定にあたっては、日本語表現の効果的学習という観点に加え、時事性や関心事に配慮し、学生の意欲や学び合い、発展的学びにつながるものを選ぶよう努めた。また、複数回のプレゼンテーションにおいては、学生が能力を発揮しやすく意義ある交流につながるテーマを選定した²⁾。そうした工夫が、授業全体を通して学生の意欲、学生間の交流等を促したと考えられる。

教師からはたらしきかけとして、また一つには、互いを尊重するクラスの関係性の構築に努めた。上述の教材や活動テーマを通して、互いの人となりや関心事項などへの理解を深めることで、互いに尊重し合う関係性も築かれていったとみることができる。その結果、クラスにおける日本語運用の場が、教室という仮想のコミュニケーション空間ではなく、人と人とが接する真のコミュニケーションの場になったと考えられる³⁾。その一端は、前節のインタビュー活動にもよく表れている。

最後に、日本の大学における初年次日本語教育の使命として、学生が自身の日本語運用に自信をもてるようにすることが重要であろう。高度な日本語力を身につけている学生であっても、外国語である日本語の運用に自信をもていない場合が少なくない。そのような学生たちに、授業を通して適切な表現の場を提供し、以後の大学における学び全般を自信をもって遂行できるよう支援することが、人間形成という点からも重要だと思われる。

注

- 1) 習得段階に応じたトレーニングや効果的に「指導」する技術の一例として、庵功雄編（2020: 292-293）にみられる「step 1, 2の文法項目」で表せる事項の分析や、菊地康人（2000, 2019）にみえる「のだ」や受身の指導の適切な順序の分析などの見方があげられる。
- 2) 日本語教育の場で学生の関心や能力を指導者がどのように引き出すかについては、拙稿（2018）で、作文教育の実践に基づき論じた。
- 3) 日本語教育の場でのクラスにおける相互の高め合いについては、拙稿（2019）で、作文教育の実践に基づき論じた。

引用文献

- 庵功雄編（2020）『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版。
菊地康人（2000）「「のだ（んです）」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, 25-51。
菊地康人（2019）「文法研究者・日本語教授者・日本語学習者の目で受身を見る：あわせて、被害性の有無にかかわる要因を求める」『日本語文法学会第20回大会発表予稿集』, 207-214。
永澤済（2018）「留学生への作文教育：関心や能力をどう引き出すか」『名古屋大学日本語・日本文化論集』25, 83-103。

永澤済 (2019) 「留学生への作文教育(2): クラスにおける相互の高め合い」『名古屋大学日本語・日本文化論集』26, 57-89.

平岡さつき・中内敏夫 (2004) 「〈教育〉という人間形成: 人間形成過程論(1)」中内敏夫・小野征夫『人間形成論の視野』, pp. 12-28, 大月書店.

キーワード: 日本語教育、大学における外国語教育、人間形成、学び合い、実践研究、インタビュー活動

Abstract**A Practical Study of Academic Japanese Language Teaching with a Goal of Human Education:
Through An Oral Communication Class**

Nagasawa, Itsuki

This paper is a practical study on the foreign language teaching in the first year of university liberal arts education. This class aims at education that leads to the human development of students, while aiming to develop the Japanese language proficiency required at the university for science students who are studying specialties in each field in Japanese.

The goal of foreign language education is, first, to acquire the ability to operate the target language “appropriately” and “accurately”. Therefore, training according to the learning stage is required, and teachers are required to have the skills to effectively “teach”. However, the ultimate goal is not training or effective instruction itself, but “acquisition of the ability of human beings to live better in this world as an individual” and “bringing out human independence and give the power to express freely” That is human education. What can such education be in the field of foreign language education at a university? The results of the practical attempt are reported.

Keywords: Japanese language teaching, foreign language education at a university, human education, peer learning, practical study, activity of peer interviews